

Title	野村教授の急逝を悲しむ
Sub Title	In memoriam : Kanetaro Nomura, 1896-1960
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.10/11 (1960. 11) ,p.897(85)-
JaLC DOI	10.14991/001.19601101-0085
Abstract	
Notes	野村兼太郎博士追悼
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601101-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

よく記され、簡単な註が編者に依ってつけられている。殊に阿波の方言「あら」は最初の意というが如き、特殊の言葉に註をつけたのはその外のところでも同様であるが、特に有用であり、親切である。

右の一書を除き、本文は四編からなる。第一編は明治以前の伝授書、第二編は明治期の通誌、第三編は明治以後の研究、第四編は参考文献である。前の三編はいずれも阿波藍に関する研究であって、明治以前のものとしては、森下禎之助の「藍作り伝授書」と「藻製法伝授書」、及び著者不詳の「藍の寝させ方」(二番藍寝方・藍元葉寝方)の三つを収めている。編者が第五編解題に記しているように、江戸時代においては藩が藍製法の技術が他に漏洩することを極度に恐れたために、その技術的記録が皆無であったことは推測に難くはないが、それにしても嘉永五年に森下禎之助外二名が松五郎なる者に与えた伝授書二巻と幕末又は明治初期とも思われる簡単な記録だけというのは、あまりに少な過ぎるよう思われる。伝授書の如きは、恐らく幕末期の所産と考えられるが、かなり多くの藍師に交付されていたものではなからうか、又その以前に藍師間に心覚えの如きものがあつたと推定してもよいと思う。

第二編の明治期の通誌には、安岡百樹「阿州産藍之説」及び椎野宰資「阿波国藍業略誌」の二種を掲げている。さすがに明治期に入っているから、その以前のものよりはるかに科学的説明がなされて居り、「伝授書」の如き藍と何らの関係もない愛染明王が単に愛と藍との音が同じところから祭神として尊崇されるような記事は見ら

れない。かつ明治初期の述作であるから、江戸時代の技術をそのまま残している部分も多く、当時の技術を推測するのにも役に立つ。

第三編は明治以後の研究と題しているが、一見すると第二編の明治期に対し、その以後の如く考えられるが、そうではなく、明治期の「農事試験場特別報告」等から採用したもので、吉川祐輝「阿波国藍作法」(明治三十一年)、町田咲吉「製藍及其製品ニ関スル研究成績」(明治三十二年)はいずれも同特別報告より採ったものであり、第三の徳島農事研究会「阿波の藍作」(大正四年)も吉川祐輝の著書を基礎として徳島農事試験場のその後の試験成果を織込んだものである。最後の「阿波藍の寝床」は本書のために、三木文庫の同人が寝床を図版及び写真を以って説明したもので、その大体を知るのに甚だ有用である。

これらの書はいずれも坊間容易に入手し得るものではなく、わが国における藍研究には重要なものであるから、これらが一書に纏められてゐることは非常に便利である。

第四編の参考文献は日支両国の農書にあらわれた藍に関する記事を抄録したものである。支那の農書については「齊民要術」と「天工開物」の二書の和訳を記したに過ぎないが、わが国の農書については古く松浦宗案の「親民鑑月集」宮崎安貞の「農業全書」「会津農書」以下十種を抄録している。(追記 急逝された教授の机上には、絶筆となつた本稿が遺されていた。未完であるがそのまま掲載したことを記しておかねばならない。——速水融)

野村教授の急逝を悲しむ

小島 栄次

野村教授は、この世に心を残されながら急逝されたことと思う。心を残される事由は多い。御自分の研究についても、内外の学界に誇るべき業績を、数多く持って居られたとは言ふものの、まだまだ沢山の仕事を計画して居られたに相違ない。また後進学徒の養成についても、やはり同様である。高村教授を始め最も優れた学者を幾人か育てあげてはいるが、なお後から続く若い人達の指導に、交らぬ熱情を示して居られたからである。

しかし慶應義塾の将来殊にわが経済学部における学問振興の問題は、教授の数々の心残りの中でも、恐らく大きな幅を占めていたに相違ない。昭和十七年経済学部長に就任されてから、慶應義塾経済学会の創立その他の活動によって、経済学部の学問振興に対する中心的推進力としてのその存在を鮮明にし、四年後学部長の位置を退かれてからも、亡くなられるまでその状態が続いた。その学問の問口の広さと深さの故に、その精力的な研究活動の故に、またその学問上の厳格さの故に、常に我々の畏敬する偉大な存在であり、また我々のあこがれる巨擘であつた。わけても私の如き憐れむべき後輩は、この三十年の間懇切な指導を受けながらも、絶えず叱られ通し

野村教授の急逝を悲しむ

であつた。去る六月始めにも、これが学校でお会ひした最後の機会であつたが、学部長としての或る失態について指摘を受けた始末である。いつかは或る程度の成長を遂げて、教授に多少とも満足して頂きたいと常に念願して居たのに、今はその望みを絶たれてしまつた。しかも亡くなられる直前十日間は、その慶應義塾は、教職員労働組合の争議があり、学生の安保反対デモがあつて、真に騒然たる有様であつた。教授は六月三日金曜日の授業を最後に休講され、遂に再び登校されなかつたのであるが、その間私は六月十六日夜にお宅をお訪ねした。その時は、約一時間ほどお邪魔して居た間、始めから終りまで、お叱言は一つもなく、いつにない物やさしい態度でなごやかに話をされ、思いなしか顔色が蒼白く、気力の弱りが感じられた。私として何となく淋しさを覚えたのであつたが、このような学校の状態に対して、教授の心中は果してどうだったのであろうか。今考えると、恐らく我々後輩の不甲斐なさに、深い不満を感じて居られたのではないかと思われ、まことに申訳ない気持ちがある。